精霊の子供の話(カエン)

かいと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
精霊の子供の話（カエン）

【Ｎコード】
Ｎ５８３８Ｐ

【作者名】
かいと

【あらすじ】
精霊が住む世界で生きる小さな子供の話。
主人公カエンは、夫を愛するあまり母親としての役割を果たさぬ母親達からの暴力を、異母弟と支えあって耐えながら生きていた。
鏡のように自分と同じ異母弟と自分の父親以外には殆ど名前も呼ばれずに過ごしていた主人公の前に現れたのは、彼が何よりも欲しがっていたものを与えられながら、それを受け入れていない子供だった。
※シーンはありませんが、暴力（虐待）に関する表現があります。

サイトに掲載した話を推敲して投稿しています。

無欲拒奪

いらない
何にも、いらない
だから
だから、お願いだから

＋＋＋

俺の朝は、いつだって最悪だ。

「次代様、お目覚め下さい」

ここは精霊の住む世界、レニア・シャーム。
広大な大地の上では小さいが、こうして住んでいれば充分に大きなこの屋敷は、＞炎王＜と呼ばれる炎の精霊、カルライの住居の一つだ。
その息子である俺は、毎朝、使い女の声で起こされて、着替えを支度され、食事を食べさせられている。
別に、人の世話になるのが嫌なわけじゃない。そんなの今更だ。
ただ、どうにも気分が冴えないのは、彼女達がどうしてここで俺の世話をしているかを知っているからだ。

「次代様、本日はどの様にお過ごしになられますか？」

今月の担当である使い女が、きらきらした目で俺を見ている。
俺は、机の上に並べられたパンやベーコンや卵やスープを全て端へ寄せて、サラダボウル一杯のレタスとトマトを機械的に口に運びながら、少し考えるふりをしてテーブルを見た。
俺の親父に気に入られ、屋敷の家事を任せられた『使い女』の、義務感と的外れな愛情の塊たちがそこにいる。

「……今日は、別宅の方に行ってから、少し外に出る。日暮れには戻るから」

最後に微笑んで、そして空になったボウルとフォークを置いて立ち上がった。

「もう終わりですか？」

少しだけ哀しそうな顔をする彼女に、ごめんお腹が空いていないんだ、と呟いて謝る。

「あの……次代様、ご昼食は？」

「適当に済ませるよ」

告げて、歩き出そうとしてから足を止めた。そして振り返る。

「そうそう。昨日のシチュー、美味しかったって、父様が言ってたよ？」

良かったね、と。
顔を真っ赤にした使い女にそう言って、歩きを再開した。

あのテーブルに広がる料理を口に入れるべきは、俺じゃない。
食事を残したまま部屋を出て、左右と正面に伸びた廊下を正面へ進む。
両側には窓が幾つも並んでいて、外には広い庭が広がっていた。
この廊下をずっとまっすぐ進んで、途中で左に曲がって更に少し行けば別宅があるのだけれど、何だか面倒になったので窓から庭へ出た。
庭をまっすぐに突っ切って、辿り着いたのは背の高い垣根だ。
この向こうには、別宅がある。
あそこには、俺の弟が住んでいる。
そして、あいつの母親ももちろん共にいる。
俺の母ではないその人は、黒い髪で白い肌をした、綺麗な人だった。
氷の精霊らしい、青い目のあの人は、母さんと一緒に親父に嫁いだ女性だった。
俺の親父は無駄に優しくて、とくに女の人に優しくて、その馬鹿みたいな優しさに捕まった二人が俺と弟の母親だ。
ふざけた事に同じ日に生まれた俺とあいつは、二人して昔の親父と同じ顔をしている。
でも、俺は親父と同じ炎の精霊で、弟は母親と同じ氷の力を宿していた。
まだ結婚もしていない二人の女性に子供を産ませたという事で、親父は周囲に色々と言われたらしい。
それでも優柔不断でお優しい親父には一人を選びきれなくて、結局二人を妻にした。
親父の屋敷を二つに区切り、本宅と別宅に分けて、俺達は月に一度、住む場所を交換する生活をしている。
今月は、母さんの番だ。
今頃は本宅の奥で、親父と二人きりで過ごしているんだろう。
親父がいる時、母さんは俺に会いたがらないから、その様子をあ

まり見たことはないけれど。
俺は、本宅と別宅を区切る背の高い垣根を仰いだ。
親父は、別宅の様子を知っているのだろうか。
あそこにいる、息子の一人がどうなっているか、知っているのだろうか。
それとも。

「……興味が無い？」

ぽつん、と一人で呟く。
それから首を振って、垣根に手を突っ込んだ。枝を掴んで、軽く引く。
以前切り取ってしまったその箇所は、簡単に外れて穴を作った。即席の出入り口だ。
そっと潜って、すぐに塞ぐ。
俺が侵入したのは、別宅の裏手にある庭だった。
手入れされる程に草花も無い、殺風景なそこに面した建物の壁を見上げた。その建物は白くて高くて、大きい。
ほとんど閉ざされている窓のうち、開いているたった一つを見つけて、落ちていた小石を拾い上げてそこに投げ込んだ。
少し経つと、そこから縄梯子が降ろされる。
それを登って、俺は中へと侵入した。

＋＋＋

「……よぉ、生きてるか？」

声を掛けながら出窓に腰掛けて、縄梯子を回収する。

「……何とか、なぁ……」

答えたそいつは、どうやら縄梯子を投げて力尽きたらしく、ぐったりと窓の傍で床に伸びていた。

黒い髪を伸ばしたまま、ばらりと床に広げて、荒く息をついている。

弟の名前は、ヒョウセツと言う。

姿形は、色さえ除けばまるで鏡で写したように俺と同じだ。

俺とこいつが似ているんじゃない。ただ、俺達二人が、親父に似ているだけだ。

まあ、今は片方がぼろぼろに怪我をしているけれど。

俺は床に足を下ろし、ヒョウセツの傍に座って倒れたままの兄弟を見下ろした。

「結構酷いな。昨日くらいか？」

「いや、一昨日……」

起き上がろうとするヒョウセツを押し止めて、その髪を掻き上げてみる。結構な大きさの痣だ。

母親譲りの白い肌に痛々しい程に刻まれた、その青い痣に眉が寄る。

ヒョウセツの体は、傷だらけだった。

『母親』からの、八つ当たりだ。

『どうして？！　どうして同じじゃないの！？』

母さんの言葉を思い出す。
親父の傍に居ない時、この別宅にいる時、母さんは俺を呼んでは俺の髪を掴んだ。
たった一つ、親父と違う、母さんと同じ土色の髪を引っ張った。
『ねぇ……貴方の所為よ？　どうしてそんな色の髪をしているの？　どうしてあの人の色じゃないの？！』
涙に震えた、痛みを堪えた声が耳に甦る。
『どうして、私だけじゃないの？！』
殴られて。
撲たれて。
踏まれて。
引っ張られて。
抱き締められて。
『ねぇ……カルライ！！』
自分を否定され続けるのが、一ヶ月続く。
「……なぁ」
ヒョウセツが、呻きながら仰向けになった。
俺は、ヒョウセツの顔を見る。
ヒョウセツは自分の腕で目元を覆っていて、その腕もぼろぼろだった。
俺より数時間遅れて生まれた『弟』は、それだけに母親からの行為も酷いのかもしれない。

「……何で、俺じゃ駄目なのかな……」

呟くヒョウセツの表情を伺うことはできなくても、どんな顔をしているかは分かる。

どうせ、俺も同じ顔をしているからだ。

「……俺じゃ……」

それは、俺達の共通の問いだった。

そして、俺もヒョウセツも、その答えを知っている。

「……仕方ないんだろ」

だから俺は、先月のヒョウセツのように、何度も何度も自分に唱えた呪文を弟に唱えた。

「母さん達は、母親じゃ、無いんだよ」

俺と弟は、同時に溜息を吐いた。

そして、俺は改めて部屋を見回す。

広い部屋だ。

本棚もソファも机もベッドもあって、それでもまだ広い。

俺達には、広すぎる。

「ベッド上がれよ。体、痛くないか？」

見下ろして言うと、腕を顔から上げた弟は、恨みがましい目でこっちを見た。

仕方ないなと立ち上がって、手を差し出す。

力無く伸ばされた腕を力任せに引っ張り上げると、ヒョウセツが呻いた。

「……もっと丁寧に扱えって」

「はいはい」

返事をしながらベッドへと放る。

痛かったのか、シーツに埋もれながらくぐもった声が上がる。

それを無視して掛布を引っ張り上げ、肩まで被せてやった。

ヒョウセツが寝返りを打ち、こちらを向く。

「母さんの番まで、あとどのくらいある？」

言葉に、俺は自分の指で数えてから答えた。

「あと十日」

それが、俺の母さんの『今』の終わり。

俺とこいつが逆転する日。

そうか、と呟くヒョウセツの髪を、手を伸ばして梳く。

傷が熱を持っているのか、ヒョウセツの額は熱かった。

時折触れる俺の指に眉を寄せながらも、何も言わずにヒョウセツは目を閉じる。眠いんだろう。

ぼろぼろに傷付いた同じ顔の弟を見詰めながら、俺はベッドに座った。

硬いベッドは傾きもせず、ただ軋んで小さな音を立てる。

それから、体をゆっくりと横に倒した。ちょうど、先客に添い寝する形になる。

「……おい、寝るのかよ」

気配で俺が転がった事がわかったのだろう、ヒョウセツが呟きながら目を開けた。

それを見返さずに、今度は俺が強く目を閉じて、小さく囁く。

「……なぁ、ヒョウセツ」

「あん？」

「……ヒョウセツ」

「……」

「ヒョウセツ……」

少しの間があって、そして弟の傷付いた手が浮き、俺の肩に触れた。

あやすように触れてくる感触が、そこにある。

「……カエン」

耳に響くその声だけが、俺を認識している。

名前で呼ばれたのは何日ぶりだろう、なんて、馬鹿馬鹿しいことを考えた。

「寝るのか？」

もう一度、小さく囁かれる。

俺は首を振り、ゆっくりと目を開けてから、

「帰る」

そう告げて、笑顔に見えるように口元を動かした。

＋＋＋

ヒョウセツが寝入るのを待って、俺は窓から外へと飛び降りた。
手入れのされていない伸び放題の芝生のおかげで、捻挫もせずにそこへと降り立つ。

「さて……散歩にでも行くか」

行く当ても無いまま、とりあえずは適当にと、ふらふらと歩き出した。
別宅の庭からそのまま出ることの出来る道へと向かい、その道に従って歩いていく。
家に帰らないですむなら、何処でもいい。
家に戻って、親父と二人きりの母さんに会うのはいやだった。
だって、親父と一緒にいるときの母さんは、絶対に俺を見ない。
さわさわと囁く木々の間を縫うように伸びた道を、軽く踏みしめた。
初めて来る道な気がする。それとも、以前誰かと来ただろうか。
少し記憶を巡らせて、ほんの数ヶ月前までつるんでいた連中とここを歩いただろうかと考える。
でも、よく憶えていない。

あいつらと最後に会った日すら覚えていないから、当然か。
あいつらは俺の事を『次代』と呼ぶから、つまらなくて会わなくなったのだ。
もう会えなくても別に困らない程度の関わりしか無かったから、会わなくても構わない。
道を囲む木々が茂りだし、やがて森になる。木陰で暗いその道を、それでも俺はぼんやりと進んだ。
どれだけ進んだだろうか、ふと、風に水音が混ざる。
近くに河でもあるのだろうか。
思い、見やった先は拓けた川原だった。
俺が歩く道に隣地する形で延々と広がるその川原は、滑りそうな丈の長い草が斜面を埋め尽くしていて、そして河の傍には砂と石で出来た足場があった。

「ん？」

そこに、子供が一人座っていた。
座って、何かをしている。
俺と同い年くらいだろうか。小さな肩に、漆黒の髪がわずかに掛かっていた。
その頭の半分を、白い包帯が包んでいる。
あの背格好と、包帯と、黒髪。

「忌み子？」

ふと思いついて、小さく呟く。
忌み子。呪われた、忌まわしい、精霊の証の無い精霊。
名前は知らないし、顔も知らない。
でも、その存在を知らない奴なんていない。
＞地王＜ウテン様が預かり、手元に置いているという子供だ。

「何で、こんな所に……」

呟き、顔でも見てやろうかと思いながら軽く身を乗り出す。
踏み出した足が斜面の草の上に乗って、体重をかけたのと同時に滑った。

「……うわ！」

なだらかな、けれど止まれはしない傾きを転がり落ちる。
草に隠れていた岩だろうか、何か硬い物にがつんと頭を打ち付けた。
痛い、と思う間も、それ以上声を上げる間も無い。
そのまま、俺の視界は暗転した。

＋＋＋

眼を開いた時、そこには見知らぬ天井があった。

「……え？」

思わず呟いて、それからゆっくりと起き上がる。
そこは、どうやら室内のようだった。
俺の左側には大きな窓があって、そこから温い風が吹き込んでいる。

「おや、眼が覚めたかい」

声が掛かる。

声の方を見ると、部屋の入り口だろう扉の傍に、女性が立っていた。金と黒に分かれた髪。銀の瞳。

その人の顔を、俺は知っていた。

親父の友達の一人で、その力が精霊の中で最も強い四人の中の一人、＞地王＜ウテン様だ。

「足を滑らせて、土手を転がって頭を打ったんだよ」

笑顔で言って、ウテン様は近寄ってくる。白くて長いその指が、俺の頭を触った。

よく分からないが、俺はどうやらその時に気絶して、ここまで運ばれたようだ。

どうして治癒術に秀でた＞氷王＜様の所でなかったのかと首を傾げつつ、俺は触れられる指の優しい感触に眉を寄せる。

「ここがね、ぱっくりと開いていたけど。痛むかい？」

「え？　いいえ」

痛みなんて微塵も感じない。

戸惑いながら首を振る俺に、痛み止めが効いてるんだね、とウテン様は微笑んだ。

「あの、俺……僕を運んでくださったのは、ウテン様、ですか？」

恐る恐る、俺は訊ねる。

「いいや。違うよ、カルライの息子」

ウテン様は微笑んで、す、とその指で窓を指差した。
見てみろと言うことだろうか。
俺はベッドを降り、窓へと近寄って、風にゆれるカーテンの合間から外を見る。
どうやら、俺がいるこの部屋は、少し小さな家の二階か三階の位置にあたるらしい。
そして、俺の見下ろしたそこには、黒い髪と目立つ包帯の子供が一人、座り込んでいた。
忌み子だ。

「……もしかして、あの子が？」

「そうとも」

尋ねた俺へ、ウテン様が囁く。
見やると、口元だけが微笑した女の人がそこにいた。
眉根が寄っているからか、その笑みはとても悲しそうに見える。

「……安心するといい。あの子は、お前に指一本触れていないよ。あの子は分相応をわきまえているからね」

ほんの少し苦しげな呟きが、耳へ届く。
指一本触れずにどうやって人を運んだのか気になる所だが、それ以上に感じた疑問を俺は口にした。

「どうして安心するんですか？」

忌まわしい子供。忌み子。

触れてはいけないと、大人は言っていた。
声だって聞いちゃいけない。
何より傍に行ってはいけない。
そんな風に俺に言い聞かせていたのは、確か、母さんと使い女だったか。
そういえば、親父は言わなかった気がする。

「何を安心するんですか？」

素朴な疑問だった。
だって、あんな小さな子が、触れただけで何が出来ると言うのだろう。
ウテン様が、少し驚いたように目を丸くする。

「あの子の事を、何か聞いていないのかい？」

「聞いてます、魔法石の無い精霊だって。でも、僕を助けてくれたんでしょう？」

なら、そう悪い奴でもなさそうだ。
俺の言葉に、ウテン様は更に眼を丸くして、そして微笑んだ。
暖かで、柔らかな笑みだった。
胸が締めつけられる程の、優しさがそこにある。

「……良い子だね、お前は」

その声でさえ、甘えを許す響きを含んでいた。
息が詰まる。
何かを言おうと口を開き、けれど結局言えないまま口を閉じた俺へと、その時不意に強い風が吹き込んだ。

「うわ！？」

カーテンが翻り、空気の塊に押し遣られてつんのめった。髪が目を叩いて痛い。

風が止んで、かちゃりと金具のなる音に目を開く。ウテン様が扉を開け放っていた。

「あの……ウテン様？」

「お前が気絶している間に、お前の父に使いを出したんだよ。カルライの息子」

「え……」

俺とウテン様の会話に、階段を駆け上がる音が重なる。

「――――……生きてるか！？」

叫びながら部屋へと飛び込んで来たのは、間違い無く俺の父親だった。

燃えるような炎色の髪。緋色の瞳。整った顔。笑えば、その辺の女性を簡単に引っ掛けられるだろう。

紛れもなく俺の父親であるその男は、何故だかとても焦った顔をして俺へ近付き、その手で俺を抱き上げた。

その手の甲から母さんが好んで付ける香りがして、眉が寄る。

つまりこの人は、母さんを放り出してここに来たのだ。

「脈は！？　体温は！？　傷は！？　痛みは！？」

「脈拍も体温も平常。傷は応急処置済みだ。私の調合した痛み止めがまだ効いている」

矢継ぎ早な質問に淡々と答えて、ウテン様は続ける。

「だから、今の内にヒョウガの所に連れていけ」

ヒョウガというのは、＞氷王＜ヒョウガキ様のことだ。
ウテン様と親父と＞風王＜セイクウ様、そしてヒョウガキ様は幼馴染で、親父がよくヒョウガキ様のことをそう呼んでいるのを俺は知っている。
親父は、俺を抱えたままウテン様を見た。

「……家で安静に、じゃ駄目か？　早く戻りたいんだが」

「大事な息子がベッドの上で大量に出血し血が足りなくて死んでもいいと言うのなら、是非そうしろ」

「う……」

親父が言葉に詰まる。
俺は、ウテン様を見た。
友達にしか見せないんだろう、意地の悪い笑顔がそこにある。
それは、あの柔らかく甘い笑みではなかった。
胸が詰まって息の出来なくなる、あの優しい顔では無かった。
そのことに安堵しながら、俺は少し目を逸らす。
あの笑みは、全てあの子のためのものだった。
あの子のものだった。

「……分かったよ、すぐに連れてくよ！」

親父がヤケクソ気味に叫び、俺を抱き上げたまま歩き出す。
どうやら俺の行き先はヒョウガキ様の所に決まったようだ。
俺は、擦れ違ってしまったウテン様に慌てて訊ねた。

「あ、あの！　あの子の名前って、何て言うんですか！？」

あの子、というのはもちろん忌み子のことだ。
俺の言葉を聞いたウテン様が、また、あの笑みを浮かべる。
それを見て胸がまた痛むのを感じながら、俺は必死になって言葉を待った。

「チノ、と、言うのさ」

「チノ？」

「そう」

『チノ』のための笑みが、そこにある。
その笑みを浮かべてくれる人が、そこにいる。

「……可愛い名前、ですね！」

『母親』が、そこにいる。
俺が焦げつくように求めたものが、そこにある。
私が付けたんだよと、ウテン様は嬉しそうに笑って言った。

＋＋＋

忌々しい
妬ましい

どうして

何もいらないから
奪う事は拒ませて
何も、取らないで

そう叫んだ俺が、それでも奪われたものを
どうして
問いかけても、答えは得られないと知っているけれど

忘却の唇

それは、いつの間にか
俺から、奪われていた

＋＋＋

ついに、一ヶ月が終る。
俺は、卓上にある暦を見ながら指折り数え、それを幾度か繰り返してから溜息を吐いた。
俺がいるのは、俺の父親の住居である方の館にある、『息子』の部屋。
俺が別宅にある部屋からここへ移って、もうすぐ一ヶ月が経つ。
母さんが親父を独占する期間が、また終る。
それは、俺に訪れる心臓に悪い一ヶ月が始まるのだということを示している。
爪と指と掌と拳と言葉と。

俺と俺の異母兄弟は、実の母親から放たれるそれを代わる代わる受け止めているのだ。

「……さて、と」

息を吐き出して、俺は立ち上がった。

一ヶ月が終るならば、やらなくてはならない事が一つある。

これは俺と異母弟に共通することで、片方のそれにもう片方が付き添うのがいつもの事だった。

使い女が用意していた、彼女の見立てたマントを羽織って、俺は足を動かす。緋色の軽い布が、ふわりと揺れた。

そしてそのまま、別宅へと向かう。

この間と同じように庭の垣根から別宅の裏庭へと侵入して、拾い上げた小石を狙いの窓へと投げる。

すると窓が開いて縄梯子が垂らされ、そこからヒョウセツが降りてきた。

着地に少しよろけたのを、肩を貸して支える。

「大丈夫か？」

そう言って覗き込んだ顔は白く、結構な状態になっていた。

目元が青黒く鬱血して、唇も腫れ、その端には赤いものがこびり付いている。血だ。

「生きてるから、平気だ」

そんな事を言って、ヒョウセツは笑った。

大丈夫、と続く言葉に、そうか、と頷いて、歩き出したヒョウセツに合わせて足を運ぶ。

母さん達が振るうのは自分達の手と言葉ばかりで、俺達はまだ一

度も、その力を使われたことがない。
いくらなんでも、それでは死んでしまうからかも知れないからだ。
俺達が死んだら親父に嫌われてしまうからとか、そんな事を考えているんだろう。

「……さっさと、ヒョウガキ様の所へ行くぞ」

俺は囁く。
今日、俺達は＞氷王＜様のところに行かなくてはならない。
治療を得意とする水一族の中で、最も力の強いあの方の所へ行かなくてはならない。
一ヶ月まともな治療をしていない身体の、あちらこちらに刻まれたもの達を消してもらうためだ。
もしも万が一親父に見られたら、もしかしたら母さん達が責められるかも知れないから。

「風の精霊、呼ぶか」

館の敷地を抜けてから、俺はヒョウセツに尋ねた。
歩き方がおかしい。捻っているようだ。

「別にいらねぇ」

呟いて顔を逸らしたヒョウセツは、けれどすぐにうめいて立ち止まった。
右足を庇っている様子にゆっくりと息を吐き、俺は緋色のマントを外した。
そして、少し乱暴にヒョウセツを座らせて、その頭からマントを被せる。
行きずりの相手に、顔の傷まで見せる必要は無い。

「おい？」

「いいから、顔隠せ。何も反論すんじゃない」

もがく異母弟へと言い置いて、辺りを見回した。
精霊達はみんな、それぞれこの世界で役割を果たして生きている。
水の精霊達なら傷を癒すし、土族の人々は食べ物や植物を育む。
それに近い系統の人々は、それに近い事を。
そして、風の一族が担う仕事の端には、移動の項目があった。
広いこの世界で、他人や物を風に乗せて運んでくれるのだ。
呼べば、近くを通りかかっていた風一族の誰かがやって来てくれる。
俺は、手頃な大きさの石を拾い上げた。
平たくて、掌より少し余る。左手の人差し指にだけ炎を灯し、それを押しつけて焦げ跡で印を刻む。
風の意味を持つそれを焼き終えてから、もと在ったあたりへとぽんと投げ落とした。
こうすれば、すぐに風一族の誰かが来てくれるだろう。
振り返ると、ヒョウセツは素直にマントを被り、右足を押さえていた。

「足、痛いか？」

「……当たり前だろ」

「だよな。……他は？」

「顔。と、背中」

それから肩かなと、返された呟きに眉を寄せる。
ヒョウセツの母親は氷の精霊だ。黒くて艶やかな長い髪の、綺麗な人だった。肌の色も白く、清楚な雰囲気を持っていた。
俺の母親とは違う物静かなあの瞳が、そこまで激情を浮かべるのが不思議だ。
大体、どうして親父がああも好かれるのか、それも全く分からない。
やれやれと軽く首を振った時、不意に、そよぐ風と共に声が落ちた。

「やあ、おはよう」

低い、男の人の物だ。
仰ぐと、そこには大柄な男の人が浮いていた。
風の精霊だ。
俺は、目を丸くした。

「……セイクウ様」

＞風王＜セイクウ。
風一族の長であり、＞王＜である、親父の親友の一人。
その人が、何故かそこにいた。
おかしいじゃないか、人や物を運ぶのが風一族の仕事だと言っても、それをするのは下っ端の役目のはずだ。
俺の視線にその疑問が含まれたのか、セイクウ様は微笑んで口を開いた。

「ちょっと、この子の散歩ついでにね」

セイクウ様の手が動き、そこに抱いていた小さな子供を見せる。

その子はきょとんと目を丸くして、俺を見下ろした。

「……ご子息ですか？」

「そう。フウキっていうんだ」

何処か嬉しそうに笑って、セイクウ様はその子を俺へと差し出した。

そっと手を伸ばし、抱かせてもらう。

若葉色のふわふわした髪の毛に、大きな深緑色の瞳と、突付きたくなる白い頬。

まだ歯も揃っているか怪しいその子は、知らない奴である俺に抱かれていても泣きもせずにこちらを見ていた。

手に伝わる温もりに、そっと微笑む。

それに気付いて、小さな子供も笑った。

「……可愛いですね」

「ありがとう」

差し出して返すと、セイクウ様は宝物を抱くようにそっと、フウキという名前らしいその子を腕の中へと抱き込んだ。

優しい仕草が眩しくて、少しだけ眼を眇める。

純粋に、羨ましい。

「さて、呼んだのは君だね？　カルライの息子」

青い空と同じ色の瞳が、俺を映した。

その言葉が少しばかり俺の心を抉ったということなど、この方は絶対に気付かない。

「……はい。僕と、そっちの子を、ヒョウガキ様のところまで」
セイクウ様は、ちらりと緋色のマントに顔を隠したヒョウセツを見たけれど、詮索などはせずに、ただ、分かったよと笑った。

＋＋＋

「どんな喧嘩をしたんだ、お前は」
ヒョウガキ様が、ヒョウセツの顔を見て眉を寄せた。
ここは、＞水王＜様の館の一室。
ヒョウセツの怪我は全て『知り合いとの喧嘩』によるものという事にして、俺とヒョウセツはヒョウガキ様の前にいる。
「だって、一対多数だったんですよ？」
ヒョウセツが作り話を呟いて、触れてくる指に顔を顰める。
ヒョウガキ様は鼻を鳴らして笑い、服を脱げと命じた。
応じたヒョウセツが、上着を少しばかり苦労しながら脱ぐ。
「……で、返り討ちにはしたんだろうな？」
「一応は。でも、あんまり怪我させられませんでした」
「それで良い。喧嘩は先に脅かしてやった方の勝ちだ」

そんな会話を交わす二人の声を聞きながら、俺はヒョウセツの背中を見つめた。
引きつれた火傷の跡が残る、小さな背中だ。
背中一面にあるそれを、ヒョウセツへと刻んだのは、俺だった。
本当はヒョウセツの身体のほぼ全てを覆っていたそれが、ここまで治っているのはヒョウガキ様のおかげだ。
ヒョウガキ様の治癒の力でも、コレ以上にはならなかった。
精霊は、相応しい役割を持っている。
水の精霊は治癒を施し、土の精霊は作物を育て、風の精霊は風を運ぶ。
そして、炎の一族の役割は戦いだった。
争いを抑えたり、争いに勝利をもたらしたりする。
精霊の世界であろうと諍いはあるし、時折現れる魔物もいる。それらを止め、勝たせ、倒し、精霊達を守る。
だから、そのためには強くならなくてはならなかった。
長になるなら、尚更だ。
思い出すのは、黄金色の腕輪。
力を暴いて引き摺り出し、放たせる為の道具だったそれを、俺とヒョウセツは腕へ填められたことがある。
どちらが強いのかを競わせるために戦わされたあの日、俺は『次代』と呼ばれるようになり、ヒョウセツはその身体を焼き爛らせた。
加減など、一切出来なかった。
恐ろしい程の消耗で息を切らせて、でも抑える事の出来ない力が異母弟を焼いた。
殺してしまうかと思った。
失うのかと、思った。
「……おい、カエン」

眺めていた背中が、ふと呼び掛けてくる。
そして傷だらけの顔がこちらを向いた。
「部屋出てろよ、恥ずかしい奴め」
熱視線を送ってくるんじゃないと続けられ、舌を出してやる。
それからヒョウガキ様に頭を下げて、大きなその部屋から出た。
出たそこは、左右へ続く長い廊下だった。
とても静かで、綺麗な輝きに満ちている。
扉をきちんと閉じて、ゆっくりと壁に寄りかかった。
俺の名を呼ぶ唯一の存在が治療を受けている部屋を、じっと見詰める。
あいつの治療が終ったら、さっさと帰ろう。歩きも良いかも知れない。飛んだ空は良い天気だったから。
つらつらとそんな事を考えていたら、静寂の中に靴音が響いてきた。
見やると、俺の左方を、人が歩いていた。
長い髪と、魚のヒレみたいな耳。細い肢体の小さな子供だ。水の精霊だろう。
男の子だろうか、女の子だろうか。
その子は、目元を白い包帯で覆い、壁に手を付けて歩いていた。
両目を怪我したらしい。
何となく見つめていた視界の中で、その子が転ぶ。しかも頭からだ。
痛そうな音がして、慌ててその子へと駆け寄った。
「大丈夫？」
手を貸して助け起こすと、その子は申し訳なさそうに笑った。

「あ、ありがとうございます」

「ああ……」

目の見えていないその子を、とりあえずは床に座らせる。ぶつけたんだろう、額が赤い。

「痛くないですか？」

言って赤い額を撫でた。白い肌に、この赤は痛々しい。

「ええ、大丈夫」

その子は、俺の手をそっと掴んだ。その指の間には水掻きがある。そう言えばヒョウガキ様の手にもあったなと、それを見て思い出した。

「あの、中に父はいましたか？」

その子はそう尋ねた。

「えっと……？」

「あ、その、あと13歩くらい先にあると思うんですけど。そこの部屋に、父はいました？」

言われて振り向く。

見えるのは、ヒョウセツのいる部屋の扉だけだ。

そして、そこにはもう一人、館の主がいる。

「……もしかして、ヒョウガキ様のことですか」

「あ、はい。……えっと……」

俺の問いに頷いて、そしてその子は少し戸惑って首を傾げた。

「あの……もしかして、お客様ですか？」

「はあ……まあ」

気付いていなかったのかと思ったところで、その白い包帯が目に付く。

見えなければ気付きようがない。

「すみません、私、あの」

「いや、大丈夫ですよ。ヒョウガキ様ならそこの部屋にいらっしゃいます」

自分の目を示そうとするのをやんわり止めて、ゆっくりと立ち上がらせた。

少しおぼつかない足取りの子供を誘導し、扉の方へと向かう。

「今、僕の弟が治療を受けてるんです。急ぎのご用事なんでしょうか？」

「いえ、それなら待ってからで大丈夫です」

会いに来ただけだからと、子供は言って微笑む。

穏やかな瞳があればとても愛らしいだろうその笑みの中で、目元

を覆った包帯の白が眼に痛い。

「あの……私、＞氷王＜第二子の、ヨウスイです」

少し黙ってから、彼女がそう自己紹介をした。多分、沈黙が怖いんだろう。

もしかしたら、その視界が閉ざされているからなのかもしれない。

「第二子ですか。上にもお一人いらっしゃるんですね」

「はい、兄が」

「そうなんですか……」

それはきっと、ヒョウガキ様に似た子供に違いない。

俺は微笑んだままヨウスイの顔を見詰めていた。

ヨウスイが、見えない目をさ迷わせるようにして俺を見る。

「それで、貴方は？」

「え？」

「貴方の、お名前は？」

問われて、ヒュッと変な音がそれにかぶさった。

それは俺の喉から発された音で、俺が目を丸くする程のその音は、けれどヨウスイには届かなかったようだった。

呼吸が、し辛い。

苦しくて、そっと己の胸元を掴む。

名前。

そうだ、俺の名前を訊ねられたのだ。

「俺、は……」

口の中が乾く。

何だ？　どうしてだ。

こんな事が、どうしてこんなにも。

「終ったぞー」

黙りこんだ俺とヨウスイの間に割り込むように声を掛けて、ヒョウセツが扉を開いた。

それに気付いて、ヨウスイがその見えない視線を外す。

「あれ？　この子、誰？」

緋色のマントを手にしたまま、こちらへとやって来ながら、ヒョウセツがヨウスイの顔を覗き込む。

その気配に、ヨウスイが微笑を浮かべた。

「ヨウスイです。貴方は？」

「俺？　ヒョウセツ」

あっさりと名乗る、その声が、とても近くで響く。

それにとてつもない衝撃を感じて、俺はその場から走り出した。

「あ、おい、カエン？！」

追いかけて来る声にも、振り返ることが出来ない。

名前。
俺の名前。
それを唇から放つ事が、どうしてこんなにも恐ろしいのだろうか。
それすら分からないまま、俺は逃げ出していた。

＋＋＋

それは、何時の間にか
俺から奪われていた

口から放つのも躊躇われる程に

ぼくは、りかいした。

そうだ
よく考えれば　それは
とても

とても、簡単なことだったんだ

＋＋＋

＞氷王＜様の館から飛び出して、湖の畔を駆け抜けて、森へ入って。
それでもひたすらに走って、どうにか辿り着いたのは見晴らしの良い丘の上だった。
肩で息をする俺の頬を、優しく吹き抜けた風が撫でる。
俺は、なだらかなその丘の斜面に座り込んだ。
丈の短い草達が、風に擽られて音を立てている。
膝を抱えた俺の前にあるのは、なだらかな斜面とそこから続く広い森、そしてその上を陣取る青い空だ。
降り注ぐ日の光は暖かくて、俺はゆっくりと目を閉じた。
丘を走り抜ける風は、俺の髪を柔らかに揺らしていく。
異母弟の怪我を治してもらいに行ったヒョウガキ様の館で、ヒョウガキ様の子供に名を問われたのは、ほんの少し前のこと。
名前を聞かれたのは久しぶりだった。
俺は親父と似た顔つきをしていて、嬉しくないことに成長するごとにその傾向は強まっているらしい。

そして親父は『四大精霊』と呼ばれる四人の＞王＜の中の一人で、だから誰もが親父の顔を知っている。
どこを歩いたって誰と会ったって、『カルライ様の』息子だと、『＞炎王＜様の』子供だと、みんなが認識するのだ。
呼び名は大体が親父の名前を先に置いた『子息』や『息子』だったし、それ以外にしたって、＞炎王＜をいずれ継ぐと決められた俺に与えられるのは『次代』という呼び名くらいだった。
誰も、俺に名前を聞くことはない。
だから、俺はずっと前から、名乗るという行為を忘れていた。
膝を抱えた手に、力を込める。
だって、恐かった。
例えば、名乗って。
なのに、その名前を呼んでくれなかったらと、思ったら。
いつの間にか、そんなことが恐くなっていた。
ヒョウセツは、名乗っていた。
なのに俺は、せっかく名前を聞いてくれたあの子から逃げ出したのだ。
恐くて恐くて、仕方なかった

「……っ」

息を詰めて、それからゆっくりと吐く。
それに合わせるように、がさりと後ろから声がした。
振り返ると、そこには俺とそう年の変わらない子供が立っていた。
その手にはスケッチブックを持っていて、きっとそれが風に煽られて先程の音を立てたのだろう、と思う。
その子供には、見覚えがあった。
黒い髪黒い瞳、その顔の左半分を隠す白い包帯。
『チノ』だった。
チノは、丘の上に先客がいることに驚いたのか、目を丸くしたま

まそこに立ち竦んでいた。

「あの……」

そっと、声を掛ける。

すると、幼いその子は弾かれたように後退った。

妙だと思って体の向きを変えると、その距離は更に開いた。

何かに怯えた、夜色の瞳が見える。

『あの子は、分相応をわきまえているからね』

ふと、ウテン様の言葉を思い出した。

忌まわしいと称される子供。

一体何人が、この小さな存在に汚い言葉を吐き掛けたのだろう。

それはきっと、目には見えない部分をずたずたにするのだろうと、そう思って眉を寄せた。

「……こんにちは……えっと……チノ、さん？」

でもきっと、俺よりはマシだ。

「ここ、気持ちの良い場所ですね」

俺は微笑みを浮かべ、チノを手招いた。

「良かったら、こっちで一緒に座りませんか？」

チノはかなり迷い、俺の誘いを断れずにおずおずと頷いて、ゆっくりとこちらへやって来た。

その顔には戸惑いが浮かんでいる。

あまり、こんな風に声を掛けられたりしないのかも知れない。
じりじりと動いたチノがどうにか腰を下ろしたのは、俺から少し離れた位置だった。
間に横たわる距離は、大人が三人並んで座れるくらい。
きっとチノの譲歩だろうそれを縮めることはせずに、その距離越しに、俺はチノを眺める。
チノは、かち合った視線の先で困ったように目を伏せて、それから慌ててスケッチブックを開いた。
膝を立ててそこに立て掛け、小さなその指がクレヨンを取り出す。青いクレヨンだ。
そして、それでスケッチブックに何かを描き始める。
写生に来たのかと思ったが、どうやら違うらしい。
チノの濡れた烏羽色の瞳は、白い紙面しか見ていない。
チノはクレヨンを変えなかった。
その手は何かを描いていたけれど、その動きを見ても、何を描いているのか分からなかった。
手以外を動かさないチノから視線を外し、俺は草の上に横たわる。
その分チノに近付いてしまって、チノがびくりと反応したのを気配で感じた。
クレヨンが紙を擦る音が止まって、数拍経ち、そしてまた聞こえ出す。
チノが握っているのは、青い青いクレヨン。
それと同じ色の空が、俺の目の前に広がっていた。
そこは広い。
そして、深い。
明るすぎるそれに目を眇めて、そして寝返りを打つ。
草の潰れた青い匂いがして、けれどそれらはすぐに、風にさらわれて消えた。
横倒しになった視界では、チノが絵を描いている。

「チノ……さん」

そっと呼び掛けると、その手が止まった。
戸惑いばかりを満たしたその右目が、スケッチブックの向こうから、こちらを窺った。

「チノ、さん」

忌まわしいと蔑まれた子供。
でも、チノは『母親』を持っている。
それは、とても羨ましいことだった。
転がったまま、こちらを見ているチノへと、手を伸ばしてみる。
すると、チノは座ったまま、少し退いた。
決して触れられたくないと、その瞳には怯えを湛えている。
その様子に更に手を伸ばすことは阻まれて、俺は手を下ろして体を起こした。
すると、先程動いた分だけ、チノが体を戻す。

「チノさん」

声を掛ける。
チノは答えない。
そういえば、一度もチノの声を聞いたことが無いと、ふと気付いた。
もしかしたら、声が出せないのだろうか。

「……しゃべれないんですか？」

率直に訊ねた。
それに僅かに目を丸くしたチノが、首を横に振って否定する。

そして、その白い手がスケッチブックを捲り、チノはクレヨンを黒に変えた。
その手が、新たに開いた紙面に何かを書き、そしてこちらへとそれを向ける。
そこには、文字が書かれていた。

『話してはいけないから』

声の代わりのそれは、とても丁寧な書体だった。
俺は、首を傾げる。

「どうして？」

俺の言葉に、俺と同じようにチノが首を傾ける。
そして、その手がまた字を書いて、再び紙面がこちらへ向けられた。

『だって、イヤでしょう』

「何が？」

『僕は忌み子だから』

感情が無いというよりも、無垢な、まっさらな目で、チノは俺を見た。
文字が言葉を続ける。

『石も無い』

ああ、そういえば、チノの額には魔法石が無い。

精霊なら必ずある筈のそれが無い。
それが忌まわしいと言われる所以だと、母さん達は言っていた。

『力も無い』

俺が炎を生じるように、ヒョウセツが氷を生み出すように、当たり前に精霊が出来ることが、チノには出来ないということだろうか。

『種族も無い』

そう言えば、『忌み子』は親無し子だと聞いたことがある。
そうして＞地王＜ウテン様が拾ったのだとか、教えられた覚えがある。

『呪われた子供だから』

当然のことだと言うように、チノはそれを綴った。

『気味が悪いでしょう』

淡々と、そう書いた。
確かに、一部の大人達がそう言っているのを、俺は知っている。
親父がそう言わないから親父に遠慮して口をつぐんでいるだけで、実はそれは『一部』では無いのかも知れない。
触れられたら呪われるだとか、声を聞いたら腐るだとか。
そんな馬鹿らしい噂は俺も聞いたけれど、あんまりに馬鹿らしくていつも聞き流していた。
俺や親父は炎の精霊だ。
この世界を脅かすものへ攻撃を仕掛ける存在だ。

もしも、『忌み子』というのが本当にそんな存在だったとしたら、俺達に確実に始末されている。
だから、ただの馬鹿馬鹿しい噂なのだ。
それでも、僅かな嫌悪と凶暴な嗜虐心が、チノを虐げているのだろうと、俺はそう認識している。
沈黙する俺の前で、チノはゆっくりと俺へ向けた字を眺め直し、何故か改めて書き直す。
その指の動きを、じっと見つめた。
ああ。
ああ、そうだ。
チノは虐げられ続けた。
その度に、ただひたすら、傷付けられた。
だから、なのだ。
沈黙したままの俺の方へと、書き終わったチノが、紙面を向ける。

『気持ち悪いでしょう』

だからチノは、諦めたのだ。
どれだけ傷付けられようとも、『忌み子』なのだから仕方ない、と。

「……っ」

意味も無く泣きそうになって、息を詰める。
沸き上がったのは同情とか、哀れみとか、そんなのじゃない。
俺の顔を見たチノが、戸惑っているのが分かった。

『どうしたの』

黒いクレヨンが、気遣いを示す。

何が『どうしたの』だ。
思い出すのは、ウテン様の顔だった。
穏やかで優しい笑みを浮かべたあの人だ。
何故、チノはこんな無意味な絶望に浸ってるんだろうか。
あんなにも穏やかで優しい、母親からの心を、愛情を与えられている癖に。
浴びてなお余るほどに、飲んでなお溢れるほどに、俺が乾き求めている物を得ている癖に。
なのに。
なのに、どうして。

「……んで……！」

震える声を絞り出す。

「……何で……！！」

哀れみでも同情でもない、沸き上がるこの感覚は、憤りだった。

「何で！！」

言葉以上に溢れた心が、雫となって頬から伝い落ちる。
熱を持ったそれは痛いばかりの怒りに満ちて、草を掴む手の甲へ降り注ぐ。
責めるように、俺はチノを睨んだ。
チノは、何も言わない。
ただ、スケッチブックとクレヨンを傍へ置いて、少し俯いて。
それでも、逃げることなくそこに座っていた。
やがて俺が顔を伏せても、少し身動いだ気配はあっても逃げ出す様子すら無い。

嗚咽が漏れて、声の代わりに吐いた息が掠れる。
顔が、熱い。
突然噴き出て止まらない憤りが、ぐるぐると頭の中を回っている。
それを声にせずに吐き出す為に、嗚咽に阻害されながら、どうにか長く息を吐いた。
少しばかり時間を掛けてそうしていると、やがて、激しく渦巻いた感情がゆるゆると鎮火していく。
目から流れていた涙が止まったのに気付いて、もう大丈夫だろうと鼻を啜り、目を擦りながら顔を上げた。

「……！」

そして目の前に座っていたのは、とても小さな子供のように、膝を抱えたチノだった。
顔を僅かに顰めて、強く目を閉じて、まるで泣きたいと言いたげに寄った眉の下で、それでも睫毛は乾いていた。
俺の動きに気が付いて、チノがこちらを見る。
俺をじっと見る黒い瞳はやはり乾いていて、ただ俺の顔を反射した。
痛々しい程に無垢な視線は、まるで虐げられた子供のようだ、と思った。
ただ相手の一挙一動を見つめて、見守って、怯えて。
大人から口々に罵詈雑言を投げられる時のチノはきっとこんな風なんだろう。
でも、ここにはチノと、俺しかいない。
なら、俺が虐めたのだろうか。
思って、考えて、血の気が引く。
その通りじゃないか。
自分が勝手に感じた憤りを、俺はチノへとただぶつけたのだ。
そんなのは、ただの八つ当たりだ。

「……あ……」

『次代』だなんて呼ばれて、期待されて、捕まって。
その束縛だってけっして憎悪からきたものではなかったけれど、とてつもなく重たい。
そうだ。
与えられる物の全てが、受け止められるものじゃない。
それが、例えば、チノにとっては、ウテン様からの『愛情』だったとしたらどうだろうか。
これは仮定だ。
けれど、忌み子とまで呼ばれ続けたチノは、きっと＞地王＜様に引き取られるまでは、あの笑顔とは無縁の生活だったはずだ。
なら、例えば自分が今まで受け取って来なかったものを突然与えられたとして、それをどうして簡単に受け取れるだろう。
疑心暗鬼になるんじゃないだろうか。
受け入れてしまっても、すぐに取り上げるんじゃないかと。
ただひたすらに与えられるのはつらいし、重い。
そう、重いのだ。受け取れない程に。
俺はよく、それを知っているはずなのに。

「……っ」

強く、唇を噛んだ。
気持ちを押しつけたのは、俺も同じだ。
恵まれている癖に、と思った。
優しい母親の愛情を得ている癖に、と思った。
羨ましかった。
なのに、チノは自分を『忌み子』なのだと言う。肯定する。否定することすら、諦める。

それに怒ったのは、俺。
だけどそれは、勝手な感情の押し付けだ。
チノには、責められる謂われもないことだ。
自分が目の前の相手をひどく傷付けてしまったのではないかと、
そう思ったら目尻に僅かに残っていた涙すら引っ込んだ。

「……チ、チノ、さん」

そっと呼びかけながら、少しだけ近寄る。
チノは動かない。
先程は、少しでも近付いたらすぐに退いていたのに。
更に近付いて、普通の友人が並んで座る程度の場所まで寄って、
もう一度名前を呼ぶ。

「チノさん」

チノはただ、俺を見つめている。
その無垢な視線に、ふと、思い付いた。
どうだろう。駄目だろうか。
駄目で元々なのかも知れないけれど。
でも、出来れば、どうか。
小さく深呼吸をして、願いながら口を開く。

「……僕……俺、カエンって言います」

どうか。

そうして、チノは、望みを叶えてくれた。

＋＋＋

「何処行ってたんだよ、カエン」

夕方。
家にたどり着くなり、大きな作りの館の門前で、待っていたらしい異母弟が声を掛けてきた。
何の用かと思ったら、緋色のマントを押し付けられる。朝、俺が着ていった奴だ。ヒョウガキ様の館に忘れていたらしい。

「怒られたらどうするんだよ」

まったく、と溜息を吐くその様子を、俺はじっと眺めた。
黒い髪をして青い目を持つ、俺と同じ顔の弟。
マントは腕に掛けたままで手を伸ばして、同じ高さにある顔の頬を抓み、口角を引き上げてみた。

「！？　何すんらよ！？」

「笑ってみろ」

「は！？」

ヒョウセツにとっては意味不明なんだろう、俺の言葉に、目の前の顔は怪訝そうに歪んだ。
手を振り払われて、警戒の目が向けられる。

でも、それで怯むような心は、今の俺には無い。
腕を伸ばして、同じ大きさの体をぎゅっと抱き締める。
「……苦しい苦しい苦しい苦しい！！」
無理矢理肺から息を吐き出させられたヒョウセツが慌てて暴れて、すぐに引き剥がされた。
少し息を荒げたヒョウセツは、すごく気味悪そうに俺を見ている。
「……お前、カエンか？　魔物とかが化けてるんじゃないだろうな」
そこまで言うことだろうか。
心外だと口を尖らせてから、大きく手を広げる。
腕に掛けていた布が落ちたけれど、気にするものか。
「笑ってろ、ヒョウセツ。俺、今凄く色々振りまきたい気分なんだ」
「何それ病気？」
「……」
本当に、俺の弟は酷い。
首を振って、ヒョウセツを指差した。
「とにかく、笑え。笑ってろ」
俺の命令口調に、ヒョウセツはますます変な顔になる。
その顔をもう一度抓んで、無理矢理笑わせた。
「笑っててくれれば良いんだよ」

とりあえずは、その笑顔で満足しておいてやる。
言い置いて、俺はヒョウセツの横をすり抜けた。
走り出して、目指すのはあの館の一番奥だ。

「……何だ、あいつ」

呆然とマントを拾いながらヒョウセツが呟くのも、俺には聞こえなかった。
頭は、他のことで一杯だった。
早く早くと気が急く中で、一生懸命に走り続ける。
廊下を駆け抜けて、目の前に大きな扉が現れて、ようやく足を止める。
扉の前で荒い息を整えて、それから扉を軽く叩いた。
返事は無い。
だから、そっと開いた。
薄暗いそこは、母さんの部屋だ。
親父は入っちゃいけないことになっている、母さんだけの部屋。
母さんは、その中央にあるベッドの上で眠っていた。
よほど眠りが深いのか、近付いても起きない。
ベッドのそばに立って、その寝顔をじっと見下ろす。
土色の、滑らかに波打つ長い髪。少し浅黒い、柔らかそうできめ細かな肌。長い睫毛。ぷっくりと膨らんだ唇。紫色の瞳は、今は見えない。
艶やかに綺麗なその人は、やっぱり、『母親』というよりも、『女の人』だった。
それでも、俺とっては『母親』だった。

「……母さん」

手を伸ばして、そっと抱き付く。
まだまだ小さい俺の体はそんなに重くも無いのか、母さんは身動きもしない。
この人が、いつだって俺を殴ってたわけじゃない。罵ってたわけじゃない。
ずっと、見ていたんだ。
気紛れにでも与えてくれるものを何一つ取り零さないように、ずっとずっと、見ていたんだ。

「母さん」

綺麗に艶やかに軽やかに柔らかく、笑う人。

「……笑ってて」

親父にしかほとんど向けてはいなかったけれど。
幸せそうなその笑顔が、大好きなんだ。
いつでも笑っていて欲しかった。
俺が我慢すれば、笑ってくれるだろうかと、そう思った。
例えば俺には向けられなくても。
どうか、と、願っていた。
いつも、いつも。

「笑ってて……」

願うのは、簡単に果たせそうな、こと。
それ故に難しいこと。
幸せに、笑っていて欲しい。
貴方が幸せだと俺は嬉しい、なんて、きっと親父だって母さんに囁いたことないだろう。

「……ん……」

不意に、母さんが動く。
驚いて俺が退くより早く、母さんの腕は俺を捕まえた。
慌てて窺ったけれど、起きた様子は無い。
きっと、寝惚けて、親父と間違えてるんだ。
だったら抵抗するのも変だろうと体の力を抜いて、腕に身を預ける。
親父なら、多分そうするんだろうから。
力が緩んだら抜け出そうと、そう思いながら抱き締められる。
そっと、掠れた母さんの声が寝言を紡いだ。

「……カエン……」

小さな声に、目を見開く。
本当に小さく、でも、確かに母さんが、呼んだ。
それは紛れもなく、俺の名前だった。
驚きのあとに、どうしようもない嬉しさが湧き上がってきて、小さく息をつめる。

「……っ」

こんなことで泣くなんて馬鹿みたいだと思ったけれど、涙は止まらなかった。

＋＋＋

「……僕……俺、カエンって言います」

そっと名乗った俺に、チノはスケッチブックと黒いクレヨンを手にして答えた。

『キレイ。炎の名前だね』

優しい文字が、俺を見つめるように白い紙の上に並んでいた。
きっと、チノ自身すら気付いていないだろう。
その顔には、とても小さな笑みがあった。
チノは、はっきりと、俺を見てくれた。
ヒョウセツ以外で、親父の名前すら出さずに『俺』を見てくれた、初めての一人だった。
嬉しかった。
嬉しかったんだ。
とても、嬉しかったんだ。

＋＋＋

そうだ
よく考えれば　それは
とても
とても、簡単なことだったんだ

どうして　こわいのか
どうして　かなしいのか
どうして　いやなのか
認めてしまえば　それは
とても　簡単で　単純なことだったんだ
俺は　この人が　あの人が　あいつが　あの子が
みんなが
とても
とても
大好きだったのだ

どうしようもなく

だから、『俺』を見て欲しかった

ＥＮＤ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5838p/

精霊の子供の話(カエン)

2010年12月19日11時33分発行